

《論 説》

国家中心の国際政治と 脱国家中心の世界政治のダイナミクス

—コミュニティアニズム志向政治勢力とコスモポリタニズム志向政治勢力—

星 野 昭 吉

1 はじめに—コミュニティアニズム志向政治勢力とコスモポリタニズム志向政治勢力の相克—

グローバリゼーションが著しく進展するなかで、これまで支配的であった主権の領域国家を中核の基盤として形成された国際政治の枠組みは大きく変容し、地球的規模で展開している脱領域的世界政治の枠組みが構築される過程と共に、地球的規模の問題群や紛争群の拡大も不可避的なものとなっている。われわれ人類の生存や日常生活は、そうしたグローバルな危機構造に支配された世界政治の枠組みに組み込まれ、どの国家に、どの地域に、あるいは、どの社会に住んでいようと関係なく、その世界政治の在り方に大きく規定され、また、影響を受けている。A. リンクラターが述べているように、これまで直接的な安全保障の必要条件を、特定の共同体（国家社会）の観点からのみ人間は考えることが一般的であったが、この数十年にわたって人間はグローバルな社会関係のなかで考えざるをえなくなっている。グローバルな相互結びつきが著しく拡大している現在、規範や制度がいかに個々の共同体が最小限度の強制力と共存できるかの古い問題を扱うばかりか、多くの人々の基本的必要条件を充足させるか、また、すべての生が依存している物理的環境を保全するかの問題を解決する方法が構築されるのかの問題をも問わざるをえない¹⁾。

1) Linklater, Andrew, *Critical Theory and World Politics; Citizenship, Sovereignty*

明らかに、そうした地球的規模の問題群や紛争群、グローバル危機構造の存在や拡大する現実を正確に描写し、適切に分析・説明し、また、妥当に将来を予測し、構築すべき好ましい世界秩序、そして、その世界秩序を実現するための処方箋を提示する、ことなどを可能にする学問や理論、知識はほとんど存在していそうにない。社会現象（社会的現実）は例外なく変化・変容しているものの、現状維持志向学問や理論は変容に十分に光を当てることはできない。とりわけ国家中心的国際政治から世界（脱国家）中心的世界政治への変容や前者の変革をめぐる問題に積極的に関心を示している国際関係論や国際政治学、知識体系は十分なものではない。その問題と関連してもう一つの重要な問題は、現実の世界が大きく変容しているにもかかわらず、その現実の全体像なり、あるいは、その全体像のなかに、社会を正当に位置づける志向性をもつ学問的・理論的アプローチが不十分であるという問題である。現実の世界で社会は明確な縫い目がなくつながっているのにもかかわらず、そうした特性をもつ現実を伝統的な学問は各々独自に理論化する分断した領域に分けている。現実の部分がそのまま知の限定され、分離された対象のままであるか、それより大きな全体にかかわる構造的で、動的な見直しを構築するための基礎となるかどうかは、学問の方法と目的の主要な問題に他ならない。社会の現実を分割した結果としてえられる対象は、間接的に現実そのものから生みだされたものであるところから、社会的慣行の変容する場合には、社会的な知の分割方法は著しく恣意的なものと、また、イデオロギー的なものとなりがちとなる。R. コックスは、そうした性向が国際関係論に現れているという。国際関係論は、従来の国際問題の現実が変容に柔軟に対応しうる適切なアプローチ能力をもっていないために、変容する国際関係の現実の正確かつ適切な理解を困難にしている²⁾。知の体系としての国際関係論のそうした性向は、国際関係（グローバル政治）の現実の変容ばかりか、その現実の全体像の理解をも困難なものにしているこ

and Humanity (London: Routledge, 2007), p.1.

2) See Cox, Robert W., with Timothy J. Sinclair, *Approaches to World Order* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 85–87.

とを意味している。

今日のように、国家中心の国際政治の枠組みが変容し、脱国家中心の世界政治の枠組みが形成されつつあるなかで、その変容の要因、変容のメカニズム、変容の意味、そして、現状維持志向国際政治の変革の必要・可能条件の抽出を通して、脱国家中心の世界政治の再構築が要求される。こうした要求はむしろきわめて正しい。なぜならば現代の国際関係理論は絶望的なほどに古いもののようなのだ。それらは、今日のグローバル政治の主要な特徴を説明することができないばかりか、グローバル政治の理解を混乱させている。いわばポスト(脱)国際政治は、動乱あるいは分裂、統合あるいは分裂、融合あるいは分裂、といった矛盾し、対立する要因がグローバル政治に共存している状態にある³⁾。領域国家中心に描かれた世界地図は、今は、現実の世界状態と一致しないものとなり、世界地図は世界政治の在り方を正確に理解するのに十分通用するものではなくなっている。たしかに、世界の政治地図の最も著しい特徴は、全地球の表面に200近い閉鎖的な領域の単位、つまり国家に区分けされている。歴史的に境界は近代世界の発見であり、国家が主権をもち、自己統治体であり、そして領域的に閉鎖的な政治的共同体あるいは政治体という考えだ。この仮定はフィクションであるものの、主権国家間で権力と利益を追求するという世界政治の正統な国家中心の概念の中心のままだ。しかしながら、グローバリゼーションは、世界政治の国家中心の考え方を問題にする⁴⁾。もちろん、世界政治の国家中心の概念を批判することで、国家中心の国際政治の現実を自動的に変えることを意味しない。むしろそうした政治勢力が弱まったとしても、現実として強く再生産されていることは否定できない。

しかしながら、脱国家中心の世界政治も現実として再生産されつつあることも肯定しなければならない。実際に、国家中心の国際政治の現実と脱国家中心

3) Ferguson, Yale H. and Richard W. Mansbach, *Remapping Global Politics: History's Revenge and Future Shock* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), pp. 1-2.

4) McGrew, Anthony, "Globalization and Global Politics," In Baylis, John, Steve Smith and Patricia Owens, eds., *The Globalization of World Politics: An Introduction to International Relations*, 4th ed (Oxford: Oxford University Press, 2008), p.23.

的世界政治の現実とが非対称的關係を構成している。また、前者の存在を適切に認識されていない。世界共同体において国家と国家との間で巨象といってよいグローバル危機が形成されていることは誰も認めざるをえない⁵⁾。しかも、そのグローバル危機は構造化しており、ますます統治したり、解決したりすることができない。拡大・強化され、それらを取りわけアメリカでの9・11同時多発テロ以来、国際共同体は、起きたことで直接に影響を受けた国々に対してのみならず、全世界に対して行きごとの意味を理解しようと試みている。明らかに、新しいグローバルな秩序はほぼウェストファリア秩序の直線的な延長である脱冷戦秩序から、国民国家の役割が不明確なものになっていることに応じて全般的に新しい脱冷戦システムへのパラダイム・シフトに反映されていると同様に、その形成過程にある。状況がますます流動的であるため、それが結局どのような秩序を形成するかを想像することはよりむずかしくしている⁶⁾。しかしながら、新しいグローバル秩序がこれまでの国家中心的国際秩序とはよりいっそう異なる内容と意味をもつものとなることを想像することは容易である。それだけ世界政治秩序のグローバル化は不可避的な現象であるからに他ならないといってよい。

現在のグローバル政治(世界政治)の正確な描写、適切な分析・説明、妥当な将来の予測、構築すべき好ましい世界政治像の抽出、そしてその世界政治像の実現を可能にする処方箋の提示、などを可能にするためには、U. ベックが強調しているように、何よりも、世界政治に対し国民国家(主権国家)中心の視点から、コスモポリタン(世界市民)的視点への転換が要求される。現在の世界政治は、主権をもつ国民国家が唯一の主体として政治の枠組みを形成し、展開させ、変容させていく国際政治ではなく、主権領域国家の境界をのり超え

5) Tuathail, Gearóid Ó., "General Introduction: Thinking Critically about Geopolitics," in Tuathail, Gearóid Ó., Simou Dalby and Daul Routledge, eds., *The Geopolitics Reader*, 2nd ed (Oxon: Routledge, 2006), p.4.

6) Sung-Joo, Han, "Introduction, in Sung-Joo, Han, ed., *Coping with 9-11: Asian Perspectives on Global and Regional Order* (Tokyo: Japan Center for International Exchange, 2003), p.2.

て地球的規模にまで政治空間が拡大したなかで、世界市民が主体として政治を形成し、展開させ、変容させていく世界政治が構築されつつある。この世界政治は事実上、これまでのような、国内政治と国際政治、国内社会と国際社会と二分化を困難なものにし、世界内政治 (Global Domestic Politics) と呼んでよいような新しい枠組みを形成している。そのためその世界政治において、規則を適用する古い世界政治と規則を変える新しい世界政治が重複し、また、競合し、個々の行動主体と戦略と同盟が分離できない内容をもつメタゲームが展開されている⁷⁾。

もちろん、世界政治が大きく変容していることは事実としても、実際には世界政治のメタゲームが主権領域国家中心の規則や勢力が脱国家中心の規則や勢力に対してより強力な地位を占め、世界政治のメタゲームは前者中心に展開されていることは否定できない。後者を過大評価することは避けるべきだが、主権領域国家中心の政治勢力という現実と共に脱国家 (世界) 中心の政治勢力が単に規範としてではなく、現実として存在していることは認めてよい。全体の枠組みのなかで強力で、中心的地位を占めてはいるが、世界政治全体の一部 (部分) であって、すべてではないことも明らかだ。換言するならば、世界政治の現実の在り方は、コミュニタリアニズム志向政治勢力とコスモポリタニズム志向政治勢力の弁証法的ダイナミクスとして捉えることが可能である。世界政治を構成し、展開させ、そして変容させるそうした二つの政治勢力の関係の在り方についての問題である。二つの政治勢力とも現実であっても、なぜ前者が依然として強く、後者が脆弱な現実なのか。前者を主張する行動主体は、主権領域国家中心の政治勢力を現実のものとして肯定し、その認識を前提に、その現実をあくまで維持・強化しようとする。反対に、脱国家中心の政治勢力を非現実的な、規範的なものにしかすぎないとして、その政治勢力の現実性を正に認識しないし、また、認識できない。ここに、現実とイデオロギーや理論、規範、思想との有機的関連性をみることができる。

そうした世界政治の現実とイデオロギーや規範との相互構成性は、現実の変

7) See Beck, Ulrich, *Power in the Global Age* (Cambridge : Polity, 2005).

革の可能性と必要性の条件があることを意味する。そもそも、重要な事実は現在、人間の条件それ自体がコスモポリタンとなっていることに他ならない。コスモポリタニズムは単に論争的な合理的理念ではない。思想的領域を超えて現実となっている⁸⁾。そうであれば、主権領域国家中心的国際政治を根本的に変革する必要条件と可能条件を発見することができる。そのことは、国家中心的世界政治勢力によって形成され、展開され、拡大・強化されている地球的規模の問題群や紛争群を解決することを意味する。筆者はこれまで、グローバルな危機構造によって支配されている世界政治の変革の必要性と可能性を、地球公共財の構築という観点から検討し⁹⁾、また、グローバル紛争構造の基本的変革の必要条件と可能条件の抽出を、現状維持志向勢力と現状変革志向勢力との弁証法的ダイナミックスのなかに求めてきた¹⁰⁾。ここでは、以上のものとも関連しているものの、世界政治をコミュニタリアニズム志向(中心的)政治勢力とコスモポリタニズム志向(中心的)政治勢力との相克運動(ダイナミクス)と捉えるなかで、地球的規模の問題群や紛争群の変革の必要条件と可能条件の抽出を試みる。この視点は2番目の現状維持志向勢力と現状変革志向勢力ときわめて類似しているものの、後者の見解は前者のそれ以上に具体化し、統合化勢のものであり、そして、地球的規模や紛争群の変革の必要条件と可能条件もより具体的なものになるからだ。

本論文の目的は、現代のグローバル危機構造を抱えている世界政治をコミュニタリアニズム志向政治勢力とコスモポリタニズム志向政治勢力の対抗的ダイナミクスであることを証明するなかで、グローバル危機構造を変革する必要条件と可能条件を模索することにある。そのため、2では、政治空間の観点から主権領域国家中心的国際政治の枠組みを検討する。3において、政治空間のグローバル化という視点から、世界政治のグローバル性とはどのようなものかを

8) Beck, Ulrich, *Cosmopolitan Vision* (Cambridge : Polity, 2006), pp. 2-3.

9) 星野昭吉『世界政治と地球公共財—地球的規模の問題群と現状変革志向地球公共財』同文館出版, 2008年参照。

10) 星野昭吉『世界政治の弁証法—現状維持志向勢力と現状変革志向勢力の弁証法的ダイナミクス—』亜細亜大学購買部ブックセンター, 2009年参照。

問い、その意味を明らかにする。4のなかで、そうした世界政治の基本的構造と特性を考察していく。5では、世界政治を形成し、展開させ、変容させるコミュニティアニズム志向政治勢力（主権的領域国家中心の政治勢力）とコスモポリタニズム志向政治勢力（脱国家中心の志向政治勢力）とを明らかにし、それら二つの政治勢力がどのような関係を構成しているかを検討する。6において、二つの政治勢力の相克の問題と結びつけながら、グローバル危機構造を抱えている世界政治の変革の必要条件と可能条件とを提示したい。

2 主権的領域国家中心の国際政治の枠組みの構造と特性

主権的領域国家中心の国際政治社会空間から脱国家（世界）中心の世界政治空間への変容をみていく場合には、何よりも前者の形成過程、その構造と特性を検討することが重要である¹¹⁾。中世社会の政治秩序の解体過程のなかから君主が主権を独占する近代国家を単位とする新しい国際政治の枠組として、ウェストファリア体制（西欧国家体系）が成立した。そのウェストファリア体制の構造と機能は、その構成単位である主権的領域国家の存在意義をそのまま反映するものであった。近代国家は、他者の支配を受けないことがない至高の権力を意味する主権を所有し、他者との関係を明確に内側と外側に二分化する領域境界、他者の存在と自己とを区別する帰属意識（われわれ意識）、主権を維持し、行使することで境界内の人的集団（社会）を統治する政府（統治制度）などの諸条件によって、強固な政治的単位としての容器である。そのため、ウェストファリア体制は、そうした一定の容器をもつ国家のみによって構成され、また、より大きな容器が存在しないなかで、自己の容器を優先させ、その容器を維持・拡大する志向性を本質的にもっていた。すなわち、そうした容器としての主権的領域国家の相互関係空間が国際政治空間を構成したのである。主権的領域国家中心の政治空間の構成は、次のような二つの仮定を前提としてい

11) 星野昭吉「グローバル化社会における世界政治の枠組み」(星野昭吉編『グローバル化社会における世界政治の現在』テイハン、2005年) 4—12頁参照。

る。(1) 主権的領域国家はその社会を内包するような世界あるいはグローバル社会は存在してはいない。(2) 政治的権威は国家の境界によって領域的に組織化され、そうして制約されている¹²⁾。そのことは、人間が形成する社会や社会空間的組織において、領域国家の主権的地位は国際社会に存在するさまざまな勢力や圧力からの浸透を受けていたいという意味に他ならない。「領域化された空間は、十分に規制されている場合には、政治的なるものにとって、また、政治的アイデンティティや遺産、血族関係などの概念にとって固定した基盤となる。……現代国家は、境界によって歴史とともに人間の野心や願望、忠誠や血族関係の容器である¹³⁾」。国際関係空間(の場)を構成する基本的な政治的単位としての国家は本質的に、権力組織(体)、つまり権力の容器に他ならない。この勢力組織が強固なものであることが、主権、境界、アイデンティティ、そして政府(統治体)を存続させ、維持させ、強化することが可能となる。国際政治空間における主要な行動単位としての国家は、権力単位といひ換えてよい。しかしながら、国際政治における国家を単純に権力単位や権力組織体としての行動主体と捉えることは同時に、権力容器の内部の諸条件、つまり、国内社会状況、国民、社会集団、民族、市民、文化、さまざまな社会的価値や利益などの存在をほとんど無視ないし軽視されることになる。そのため、国際政治における行動主体は単に大小の権力単位のブラックボックスとして理解される傾向が強かった。

そうしたブラック・ボックスとしての主権的領域国家は他の国家との関係では相互に対他的主体となるところから、相互に自立的、排他的関係を構成しているため、国際政治社会空間には主権的領域国家を統治しうる超越的権力体(権威体)の不在の状態、つまりアナキー状態が支配的となる。たしかに、国際政治社会空間にすべての国家を超える権威的統治体が存在していないという意味でアナキー社会といえることができるが、現実的な意味で、必ずしも無政府

12) Lacher, Hannes, "Putting the State in Its Place : The Critique of State-Centrism and Its Limits." *Review of International Studies*, Vol. 29 (2003), p.521.

13) Rajaram, Prem Kumar, "Disruptive Writing and a Critique of Territoriality," *Review of International Studies*, Vol. 30 (2004), p.201.

状態とか無秩序状態とはいうことはできない。権威的統治体の不在が現実であっても、その統治体に代る機能を果たす部分的な統治的メカニズムや仕組みが、また、一定の秩序を維持することが可能な制度や規範が存在している。事実、たとえアナキー状態のなかでも、主権的領域国家が国際政治の唯一の主体となることが可能であり、また、規則的な相互作用関係を構成することが可能になるための一定のルールや原則が相互に認められている。主権的領域の相互承認、他国の領域内への非介入の原則、それぞれの領域内での支配的管轄権の承認、自国の領域を外敵の侵入から保護するための軍事力行使の正当性の原則、などの規則や原則によって国際政治が形成され、展開してきた。国際社会にアナキー状態であるとの主張は、政治的現実というよりもイデオロギー（ドグマ）といってよい。アナキー状態は先天的なもの、与件というよりも社会的構成物に他ならない。もちろん、主権的領域国家も同様に、社会的構成体である。それだけに、国際政治において現実的なものとされている概念が本来的に規範的なものであり、イデオロギー的なものであることに留意しなければならない。また、前者と後者とが相互構成関係にあることも理解しなければならない。アナキー社会も国家もその好例に他ならない。

いずれにしても、実際、国家の政治空間の在り方もその領域性に大きく依存していた。国際社会においてどの領域国家も、他国の勢力の浸透を防ぐことを可能にする主権を支え、あるいは主権の及ぶ空間を規定する一定の境界（国境）をもっている。どの領域国家も、外圧を防ぐことによって、また、他国の権力からの自立をはかることによって、国家社会（共同体）を保護しなければならない。どの領域国家も自己の目的や利益を実現するためにも、また、その領域あるいは国境を保持するためにも、権力組織（単位）としてのいかなる国家も、特定の領域的空間の内部において暴力的権力を独占し、その能力を支配する組織的機関の相対的自律性を維持し、そしてまた、安全保障を国民に提供する国家権威に対する公衆の受け入れを可能にする正当性を保持しなければならない。どの領域国家もそうすることによって、外的勢力から国境や領域空間の保持を強化する。

多くの国家は一定程度に、固い、高い、厚い領土的壁を基礎として支えられ

た政府を中心とする政治制度によって、自国内の挑戦的圧力ばかりか、自国に対する攻撃的な、また、抑圧的な勢力に対抗することができた。もちろん、対抗できる国家は他国との権力関係がほぼ対称的なものであることが必要であるにしても、強固な領土的境界の存在こそが、権力組織としての国家や政府の統治権力によって支配される国内政治社会の存続や安定を保証することができたのである。国家主権と領域的境界とは相互に支えもち、また、相互に存在しあう関係を強化することによって、対外的にも対内的にも領域国家としての生存と存続、機能遂行を可能にしたのである。そうした条件が継続するかぎり、領域境界は、国際政治、国家主体、国内社会、そして国民（市民）との有機的な相互依存関係を構成するいくつかの主要な機能を果たすことが可能であった。それら一連の機能遂行は領域的境界の存在意義を自ら証明するものであり、また、次のような重要な機能を果たすこととなる¹⁴⁾。

第1に、主権的領域境界（国境）は、自国の利益や生存にとって好ましくない、また、不必要な外的勢力や圧力が国家や国内社会へ無原則に浸透することを防ぐことが可能だ。権力組織としての国家や政治共同体としての国内社会は相互に、政治的空間の枠組みやその秩序を維持し、そして、対外的圧力や介入を回避することでその地位を維持し、その機能を充足することができる。そうはいっても、領域境界が果たす機能は必ずしも具体的かつ現実的意味をもつことなしに、国家主権対超国家的権威という非両立的、非対称的關係を象徴するシンボリックな、また、規範的な意味をもっていることを認めざるをえない。また、国境は必ずしも地勢的な、物理的存在というよりも、むしろ一種の社会關係の空間を意味する。いずれにしろ、国境は物理的にも理念的にも外的勢力や圧力、關係の浸透を防ぐことができる不浸透の容器とみてよい。

第2に、領域境界はその内側の世界と外側の世界とを二分化する重要な役割を演じることができる。すなわち、前者は、その境界内に、統治体（政府）、秩序、安全、統合、安定、平和、平等、調和、協力、道徳、規範、相互依存関

14) Hoshino, Akiyoshi, *Deconstruction of International Politics and Reconstruction of World Politics : Global Politics and Global Problems* (Tokyo : Teihan 2002), p.268.

係などをもつことができる。それとは対照的に、後者はつねに、無政府、無秩序、不安全、不統一、不安定、戦争、紛争、不平等、対立、不道德、無規範、支配—従属関係、などの状態が支配的である。両世界は異質の政治社会空間を構成し、両者は著しく非対称の関係にある。どのような国家もつねに、境界内での自己の支配を正当化し、境界外での戦争や紛争は必然的に生じるものであり、きわめて起きて当然とみられてきた。さらに、いかなる領域境界も、両世界の勢力を分断する役割を演じることになる。なぜならば、両勢力の結合は国家の脆弱性を意味し、国家主権や政府の政治的正当性を動揺させる可能性があるからに他ならない。領域境界の存在は、自国を他国から区別するばかりか、他国を排除したり、差別する機能も果たしている。したがって、領域境界はそれ自体、他国との対立や紛争、戦争を生み出すことがめずらしくはない。

第3に、領域境界は固有の自己のアイデンティティや道徳、規範を創り出し、国内の政治共同体の構成メンバーに提供する。どの国家もそれらメンバーのアイデンティティや忠誠心の積極的な独占をはかる。多くの国家は一般的に領域境界内の世界で通用する倫理や規範、宗教とその外の世界で支配的な倫理などから意図的に区別することによって、前者と後者との非両立的関係を強調することで、自国に対する国民やエスニック集団からのアイデンティティや忠誠心をよりいっそう高めていこうと試みる。国家は領域内での同質の倫理や規範の存在を訴えることによって、国家と国民との間の、また国民間の連帯感や一体感を高めていく。そして、他国と倫理や規範との異質性を指摘することで、他国との紛争や対立関係の不可避を強調するなかで、国民のアイデンティティや忠誠心の独占を正当化する。また、そうすることによって、他国との紛争や対立、戦争に際して、国民の協力や犠牲を求めていく。領域境界は両国の政治的社会的間において非両立的な倫理や規範の存在を正当化しようとするれば、他国側の反撥や緊張を生み出すことになり、両国の間で不必要な紛争状況を生み出すことになる。いわば相違の正当化ディレンマを再生産する。

第4に、領域境界は内側世界の勢力が自由に外側世界へ出ていったり、国家政府にとって都合の悪い強力な関係をもつことを防いだり、また、都合のいいようにコントロールすることを可能にする。国境を越えて自由に内側の勢力と

外側の勢力が自由に出入することを無条件に許したり、あるいは、そうした相互浸透作用を強力にコントロールできないことは、国家主権の地位や国家の自立性や權威性の低下を意味し、国家政府が重要な機能を遂行していくに必要な権力の低下を大きく進めることになる。

したがって、領域境界は、実体としてもシンボルとしても国家主権、国家権力、權威、自立性、正当性、アイデンティティ、忠誠心、そして自律性と結びついており、国際政治社会空間からの自立的な政治空間を維持し、そしてその存在を正当化することになる。国境内の空間を最優先する政治的境界線をもっている近代国家の多くは、その境界内に生活を営んでいる人々に特権を与え、彼らのナショナリズムあるいは市民権の最も強力かつ持続的なイデオロギーと結びつく第一のアイデンティティを与えている¹⁵⁾。国家中心的政治勢力としての一つの側面が、領域境界に他ならない。

以上みてきたような領域境界の果たす重要な機能を指摘することができるものの、国際政治社会において領域境界が抱える問題を検討しなければならない。第1に、領域境界がもつ意味がすべての地域の国々や政治的単位で同一のものではなく、その存在意味が異っていることだ。強固で、重要な機能を果たす領域境界が存在する地域は、世界の一部に、とりわけヨーロッパの大国間に限定されていた。近代国際システムとその支配の対象である植民地領域との間で強固な境界があることを無視すべきではない。ヨーロッパの大国の境界はそれぞれ他の大国のそれとの関係で排他性をもつものばかりか、非ヨーロッパ地域空間に対しての境界の排除性も著しく高い。強固な主権的領域国家の政治的共同体の構成員のアイデンティティの対象や忠誠心の対象はほとんど、国家それ自体であった。近代国際社会において初期の君主主権国家は事実上、君主のみが、また、国民主権国家はそれ自体が、人々の政治的アイデンティティを独占してきた。

第2に、近代国際システムにおいて、脱(非)国家主体はほとんど存在して

15) Falk, Richard, *Predatory Globalization: A Critique* (Cambridge: Polity, 1999), p.158.

いなかったし、脱国家的社会運動をはじめとして脱国家的関係のネットワークもほとんど形成されてはいなかった。領域国家間関係が国際システムにおいて支配的であったため、固い国境の存在意義がきわめて高いものであった。したがって、領域国家間関係と脱国家主体間関係との対抗状況は存在することがなかった。領域国家間関係は国境を越える脱国家的な政治空間も共通問題ももっていないため、国境を越える共通意識、共通の目的、共通の政策、共通の行動様式や協調行動などをほとんどする必要もなく、また、そうしたことを実現することも困難であった。むしろ領域境界の存在意義や機能を維持し、強化すること自体が重要視されてきたといえる。

第3に、領域国家間関係において国境の強固な存在を基盤に国家間関係の維持をはかりながらも、国家は積極的に相互依存関係を進展させてきた。しかしながら、それらの国々は国内の政治空間と国際政治空間の二分化の仮定の上で、国家間関係を構成してきたのである。その結果、領域境界が国際政治(関係)で重要な地位と機能を果たしていると評価され、また、正当化されてきた。そうした認識がそのまま国際政治において国境が決定的に重要であるという現実を構成していった。

したがって、領域国家の存在を無視して国際政治をイメージすることは、困難であるばかりか、国際政治の現実を正確にかつ適切に理解することもできない。領域境界の排他的な所有を確立すること自体が国家の最大利益となり、境界はわれわれが国際政治について考える方法にとって基本的であり、また、政治的実践にとって重要である。「領域的境界は基本的に、根底、背景、戦略要点を依然として提供している国家間関係としての国際関係の構成要素である¹⁶⁾」。そうした領域境界を国際政治空間の枠組みとして評価することは、過去において適切であったものの、グローバル化の進展と共に現在はその存在意義や地位、機能を大きく低下させている。たしかに、領域境界が今日でも部分的にはその存在意義や地位、機能をもっていることは否定できない。現在でもグローバルな政治社会空間においても領域境界は一定の地位や機能を占めている

16) Hoshino, Akiyoshi, *op. cit.*, p.269.

る。そのため脱領域政治空間と領域政治空間とがどのような関連性を構成しているかを明らかにすることが必要となろう。そこで、領域境界がもつ国家間でのどのような国際政治空間を形成しているのか、また、どのような構造的特性をもっているのかをみななければならない。

第1に、領域国家間が構成する国家中心的政治社会空間（国際システム）は、その空間が地球的規模のものをもつのではなく、主権的領域空間で形成する以上の空間的広がりをもっていない。政治的空間がとりわけ欧米大国間で構成されており、空間的広がりが地域的に限定されているのみか、その関係を構成する社会関係網の内容は、その密度は薄いものであり、かなり単調なものであった。また、関係網はそれほど構造化されてはいないといってよい。国際社会での価値配分決定過程にどの国家も対等かつ自由に参加していないし、大きな影響力を等しく及ぼしてはいない。あるいは他国に影響力を及ぼしてはいない。それができるのは、大きな国力、とりわけ軍事力を所有し、行使するいくつかの大国や先進国だけである。形式的には主権的領域国家は平等な主権をもっているものの、現実的には不平等で、対等な関係を十分に構成することはできない。同様な条件をもっている大国や先進諸国間の関係は相互依存関係を比較的に高めてはいるものの、全地球的レベルでの時空の圧縮現象はほとんど進んではない。しかしながら、国際社会での価値の配分決定過程はかなりの程度制度化されている。そうした条件をもっているのは大国のみであるところから、領域国家間関係は大国中心的政治空間に他ならない。

実際には、全体の国際政治空間は二重構造となっている。大国や先進諸国と開発途上諸国との間に垂直的な支配—従属関係構造が形成されている。相対的に対等関係を構成する領域国家の存在とその支配の対象となる地域との間で、具体的な非対称的な格差がつけねに存在してきた。国際的空間は二重の構造をもって対立（紛争）関係を構成している。国家中心的政治空間や大国中心的政治空間は、大国を中心とする安全保障や経済的価値をめぐる比較的に限定的な価値配分決定過程が常態化していた。また、そうした政治空間の支配の対象となってきた過去においては、植民地や従属地域が、今日では第三世界の政治空間が、共存している。いずれにしても、そうした二重の政治空間が存在し、

それらが全体の国際政治社会空間を構成していることが無視され、後者の政治空間は全体のそれを構成する空間として理解されてはいなかったことに留意すべきである。

第2に、主権的領域国家間関係の政治社会空間においては、支配的な価値や利益の内容はきわめて集約的に国家安全保障価値が支配的であった。主権的領域国家の生存の安全を保障してくれる領域国家以上の超権威的統治体なり権力機構が存在していない国際政治社会空間において、どの国家も自国の領域の安全保障を確実にすることが最重要な価値となる。領域境界外の勢力の浸透をいかに防いでいくかが対外政策と課題となり、それだけ国家は固い領域境界によって閉鎖的な、また、排他的な政治空間を積極的に形成するよう試みることになる。そうした試みは領域境界内部の要因とも結びついている。境界外勢力や圧力に対する閉鎖的・排他的政治空間は、境界内勢力や圧力に対しても閉鎖的・排他的空間となることを意味する。そのため、領域境界の外側の政治世界と内側の政治世界における価値や利益、権力の相互運動性は領域境界によって分断されている。しかも、従来はアナキーな国際社会空間において領域国家にとって安全保障価値が中心的地位を占めていたために、比較的単調な国家間関係が構成されると同時に、いかなる国家も相対的に閉鎖的・排他的政治空間を維持することが事実上、可能であった。すなわち、主権的領域国家間関係と国家政治社会空間とはほぼ一致していたとみてよい。両者の間には本質的に大きな差はみられない。

第3の主権的領域国家間関係の特性として指摘すべきは、国内政治社会空間と国際政治(関係)空間とが明確に区別(二分化)されていることである。領域境界内の価値配分決定過程と境界外のそれとが二分化された空間(領域)を形成している。この特性は上の第2の特性と連動しているが、領域境界が内外共に閉鎖的政治空間を構成している以上、境界外の世界と境界内の世界との価値配分過程や権力関係の非連続性はむしろ当然である。国境をはさんで異質の、非対称的な政治空間が存在することになる。国境内の政治状況や政策決定が国境外のそれに影響を及ぼしたり、運動することはほとんどなく、両者は関係のない別の政治社会空間の問題とされた。領域境界内の政治的条件や問題が

国際政治化したり、国際政治的条件や問題が国内化することはきわめて低いものでしかないといえる。国際政治社会空間で作用する主権的領域国家はその内部がブラック・ボックス化され、単に固い、かつ具体的な領域境界を基礎に組織化された権力容器（権力組織体）として行動する主体（単位）とみなされてきた。

第4の特性は、国際政治社会空間で作用する軍事力の占める地位や機能が著しく高く、大きいことである。国際政治社会における超権威的統治体が不在のなかでの国際的価値配分の決定手段として、各国家の、また、いくつかの国家集団の軍事力が唯一の、支配的なものだった。国家政治社会空間においては、安全保障がすべての領域国家にとって最大の価値であったことも関連しているように、その価値の充足は結局、アナキーな社会のもとでは何よりも軍事力に依存することになる。また、国際政治社会空間のなかでは多くの領域国家の間で共通の価値、共通意識、共通の目的、共通の政策、共通の行動、経済状況の同質性、共通の道徳や倫理、規模、宗教、などがほとんど存在していないため、秩序度の低い状態が一般的であり、軍事力が決定的に大きくモノをいう政治空間となる。アナキーな国際政治空間のなかでは、自国の行動様式を含め他国の行動様式や国家間の関係様式を規制したり、管理したり、また、左右することは容易ではないだけに、自国の求める価値や利益、権力、資源を手に入れたり、他国の行動様式をコントロールする手段として軍事力が重要な役割を果たすことになり、いかなる国家も軍事力の拡大を無限に求めてきたのである。そうした結果、永続的な軍備拡大競争が常態化することとなった。その同じ軍事力は、主権的領域国家内の政治空間においてもその秩序の維持や支配体制の強化にとって重要な機能を果たしてきた。軍事力は、内側の政治空間と外側のそれとの二分化を容易にすると同時に、それら両側で高い地位を占め、決定的な役割を演じてきたのである。

第5の特性として無視できないものは、国際政治社会空間において価値や利益、権力、資源の配分に関する不平等配分構造が顕在的にも、潜在的にも存在していることだ。国際政治社会空間が、一定の価値の所有体としての、また、権力のとりわけ軍事力の単位としての主権的領域国家から構成され、展開され

てきたが、その国家はビリヤード・ボールのように、同質の、また、同一の規模をもっているものではない。各々の国家は事実上、質的にも量的にも同一の価値体系も、規範も、また、軍事力を中心とする国力(潜在的権力)も同じものではない。さらに、同一の価値観、文化、道徳感をもつてはいない。国際政治社会空間には、とくに価値と権力の不平等配分構造が形成され、維持・強化されてきたことを正確に認識することが必要である。そうした領域国家がもつ基本的条件自体が、国際政治社会空間をアナキーの場に、また、紛争状態の場にしてきたのであって、そうした現実には先天的にアナキーでも紛争状態でもない。価値や権力の不平等配分構造は本来的に、社会的構成物に他ならない。それは必然的、自然的、不可避的構成物ではない。

第6の国際政治空間の特性は、以上の特性と結びついて、その政治空間独自のアイデンティティの存在はきわめて弱いものだという事だ。人々のアイデンティティや忠誠心は個人的にも集団的にも自己の領域政治空間に排他的に向けられ、その領域空間を越えて別の政治空間に、また、国際政治社会空間への広がりは見られない。領域国家政治空間が人々のアイデンティティも忠誠心も独占してきたのである。領域境界がそうしたアイデンティティの在り方にとって重要な役割を果たしてきた。国境の内側での政治空間で帰属意識、つまり「われわれ意識」が成立し、外側の政治空間との区別として、その空間に対する差別や排除意識として作用してきた。他方で、内側では領域国家への犠牲意識、忠誠意識として機能してきたといえる。

第7の特性は、国際政治社会空間を構成する主体は、主権の領域国家ばかりで、脱(非)国家主体が具体的に主体として登場し、主権国家主体と対立したり、それを補完したり、それに従属したり、主権国家ができないことを、また、新しいことを積極的にやることはほとんどなかったことである。したがって、国際政治社会空間は国家間政治関係が支配的で、脱国家間関係はほとんど存在しなかった。そのため、国際政治社会空間と国家間政治関係はほぼ同一のものとして理解することができた。

第8の主権領域国家間関係の特性は、その関係の在り方が本質的に、「ゼロサム・ゲーム」によって形成され、展開し、そして変容したことである。

なぜならばそれぞれの領域国家は相互に自己の国家利益や権力の維持・強固を求めて闘争を繰り返してきた。それぞれの国家が他国より以上の国家利益や権力を求めたゲームを展開した。両国が協調するなかで、両国とも国家利益や権力をうることを求めたのではなく、自国のみのもこれらの獲得を追求してきたことで、一方が得て、他方が失うという $+ - = 0$ ゲームが支配的なものとなった。そうした「ゼロ・サム・ゲーム」のルールが、準アナキーな国際政治社会空間では構造化しており、どの領域国家もそのルールにしたがって行動してきた。そのルールを否定することはそのまま国家利益や権力を失うことになる以上、大国は積極的にそのルールにしたがって行動することは避けられなかった。権力関係が比較的に対称的な大国間のゲームであれば、相対的利得を求めざるをえなかった。そのルールを認めないで行動をとることはつねに自国の滅亡につながる危険性を懸念していた。「ゼロ・サム・ゲーム」のルールは先天的に存在していたのではなく、国際政治社会の構成物に他ならない。大国はそのルールに基づいて行動することが不可避であるとの認識で、ルールを追い求めてきた。

したがって、以上の主権領域国家から成る国際政治社会空間の特性から理解できるように、国際政治の在り方は、国家中心的政治行動様式が支配的であった。主権的領域国家の価値や利益、権力、資源を中心に求める勢力や主体、目標、政策が国際政治の在り方や内容を規定した。すなわち、そうした勢力が国際政治の秩序を形成し、展開させ、変容させてきた。国際秩序は、主権的領域国家的勢力や価値、権力、資源の配分構造であり、国際政治社会空間の単位や主体、部分、個の寄せ合わせた全体像である。そのため、国際政治社会空間で作用する力学は、国家中心的秩序、あるいは、コミュニタリアニズム中心的秩序とってよい。

3 グローバリティの形成と国際政治秩序の変容

主権的領域国家の境界を、また、それら国家間で構成される国際秩序の枠組みとその存在意義を大きく変容させたのがグローバル化に他ならない。不浸透

の、固い貝殻の役割を果たした主権的領域境界によって守られてきた領域国家政治社会空間の形成・展開も、また、それら空間の間で構成される国際政治社会空間の形成・展開も、歴史的・社会的構成物であるかぎり、それぞれの政治社会空間の内的・外的環境の変容する過程のなかで、それぞれの政治社会空間の在り方、形態、機能、そして存在意義も著しく変容する。また、領域国家政治社会空間とそれら空間で構成される国際政治社会空間とが別々の存在ではなく、著しく両者間で有機的な相互連動関係を構成し、両者の境界を不透明なものにすることも、きわめて当然なものである。まさにそうした変容現象を生みだした条件がグローバル化に他ならない。経済的・政治的・社会文化的・技術知識化・地球環境の現象としてのグローバル化は、領域国家の枠組みを意味する境界を脆弱なものとし、また、きわめてあいまいなものにし、国家政治社会の内外で抱える問題を統治したり、規制することを困難にする。グローバル化の勢力は、これまでの自主的、閉鎖的、排他的、自律的な政治社会空間の枠組みを形成してきた領域境界がその内外の勢力の影響を受けるなかで、従来の地位や機能を果たす能力を大きく低下させることにより、その政治社会空間の在り方を根本的に変容せざるをえなくなった。そのことは、国際政治の主体としての領域国家も、その主体間で構成される国際政治空間も、グローバル性をもつことになったということの意味する。

同時に、領域国家間国際社会というよりグローバル（政治）社会が形成されていることを意味している。しかしながら、グローバル社会の形成は領域国家間国際社会の存在をまったく否定するものではなく、依然としてグローバル社会においても大きな存在で、潜在的には重要な機能を果している。換言するならば、領域国家間の相互作用関係の驚異的な増大と強化のみならず、領域国家をも含め世界のすべての行動主体（単位）間で構成される社会関係のネットワークの増大と広がり状態と、あるいは、すべての行動主体が関係のネットワークを構成し、また、結びついている状態といえよう。重要な視点は、グローバル社会全体の大きな一部を構成しており、しかもその大きな一部はつねにグローバル社会全体と結びつくばかりか、グローバル社会全体の在り方を左右していることだ。グローバリゼーションは、主権的領域国家空間とそれら間

の国際政治の空間を大きく相互に構成し、相互に連動作用を構成し、相互に浸透し、また、相互対称的關係を構成している。

結局、前者と後者の政治社会空間の在り方の変容とグローバル化との係わりをみる必要があるであろう。政治社会空間は固い領域境界をもつ主権国家間関係から構成されているが、その領域境界が変容したことで、国際政治の在り方そのものも変容することはきわめて当然である。J. ショルテがいうように、グローバル化は事実上、脱領域化 (deterritorialization) あるいは超領域化 (supraterritorialization) に他ならない¹⁷⁾。固い、閉鎖的な、そして排他的な境界は、その外側の世界と内側の世界に対して、その被浸透性を著しく高め、その自主性、権威性、自律性、正当性、排他性、などを大きく低下させている。領域国家政治空間の境界線には著しくその機能を低めたり、弱めたり、あるいは、喪失したりするという形で、グローバルな政治社会空間を構成する一部の政治社会空間としての存在となっている。グローバル政治社会空間は単に固い境界をもった領域国家政治社会空間の寄せ集めた空間ではない。今日では、政治空間と領域とは同一のものではなく、両者を混同すべきではない。領域はもはや国家やわれわれが政治的目的のために組織することは十分ではないし、現実の政治空間を正確に描くことができない¹⁸⁾。領域や領域境界は現在では容易に超えることが可能であるばかりか、そもそも領域境界も含めて境界は本質的に社会的構成物である¹⁹⁾。

グローバル化は、世界が一つのグローバルな境界のない政治的社会空間となりつつある変容過程に他ならない。すなわち、政治現象をグローバルな次元をもつ社会現象 (活動) としてつねに捉えるべきだ²⁰⁾。領域国家間関係政治現象

17) See Scholte, Jan Aart, *Globalization : A Critical Introduction*, 2nd ed (London : Macmillan, 2001).

18) Ferguson, Yale H. and Richard W. Mansbach, *Remapping Global Politics : History's Revenge and Future Shock* (Cambridge : Cambridge University Press, 2004), pp. 73-81.

19) See Tétreault, Mary Ann and Ronnie P. Lipschute, *Global Politics as If People Mattered* (Lanham : Rowman & Littlefield, 2005), pp. 93-106.

20) See Opello, Walter C. Jr., and Stephen J. Rosow, *The Nation-State and Global Order : A Historical Introduction to Contemporary Politics* (Boulder : Lynne Rienner,

は、領域国家中心の現象が支配的であり、全体の現象より部分中心の現象が一般的で、グローバル性はほとんどない。これまでの領域国家間の政治関係現象の枠組みを大きく変容させた特性は、領域国家間政治関係も含めてすべての政治現象がグローバル性をもっていることである。R. コックスが強調しているように、世界における社会変容がグローバル次元をもっているために、社会生活における現代の歴史的変容は、世界秩序構造の視点に立つことによって把握されることを通してはじめて意味をもつことが可能だ²¹⁾。グローバル政治の本質や特性を正確に描き、適切に証明し、また、妥当な将来の予測を可能にするためには、領域境界が衰退し、国家公共空間から脱国家公共空間へと大きく変容していることを認識した上で、領域国家中心の国際政治を支えている方法論的ナショナリズムを克服し、方法論的グローバリズムを志向すべきだ²²⁾。

したがって、世界政治現象がグローバル性をもつことによって、領域国家中心の国際政治理論の中心的概念であった、国民国家としてのアイデンティティ、固い領域的線としての国境、そして主権国家間の権力の相対的安定としての秩序がその意味を変容させている。グローバリゼーションの進展によって、それぞれの基本的概念はグローバル政治の枠組みにおいて領域国家の外圧と内圧の勢力によってその地位や機能、存在意義を大きく変えざるをえない。政治学のみならず経済学や社会学を含んでこれまでの主権国家を前提とする近代社会科学の固定的で、閉鎖的な概念の枠組みが脱構成され、グローバル化された概念的枠組みの再構成が早急に要求されている。これまでの近代社会科学の基盤は、明確に区分けされ、固定化され、本質的には連続的なものである地球的空間のなかに社会関係の領域化を前提としていた。領域主権的認識論は、政治的、社会的、経済的あるいは過程に言及するなかであろうとなかろうと、近代国家間システムの歴史的に唯一の領土的構造の社会空間的組織の一般化さ

1999), pp. 223–36.

21) Cox Robert W., "Social Forces, States and World Orders: Beyond International Relations Theory", pp. 208–210.

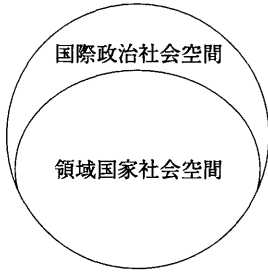
22) See Holton, Robert J. *Making Globalization* (Hampshire: Palgrave Macmillan, 2005), pp. 89–109.

れたモデルの転換が求められている。明らかに、領域化アイデンティティ、領域化境界、領域化主権、領域化政府（統治体）、領域化秩序、領域化（国家）利益などが、脱領域化アイデンティティ、脱領域化境界、脱領域化主権、脱領域化政府（統治体）、脱領域化秩序、脱領域化（国家）利益などに再構成されねばならない。

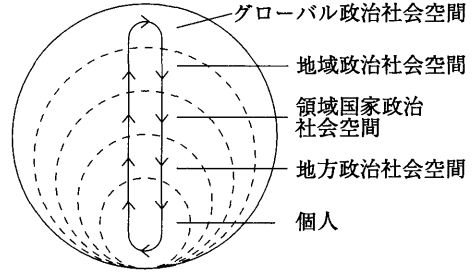
したがって、グローバリゼーション＝グローバル性＝脱領域性＝政治社会空間のグローバル化という等式が一応、成り立つといてよい。従来は、第1—1図の示すように、ナショナル性＝領域性＝政治社会空間のインターナショナル化、すなわち、領域国家中心的国際政治社会空間であった。国際政治の主体が主権の領域国家であり、それらの国家間によって国際政治社会空間が構成されている。領域国家社会空間と国際政治社会空間との間には一応、二分化が可能であり、両空間の間には相互連動性や相互浸透性は著しく弱い。その理由は、前述した通り、領域化アイデンティティ、領域化境界、領域化主権、領域化政府（統治体）、領域化秩序、領域化（国家）利益が、すなわち、ナショナル性、領域国家中心的国際政治システムが支配的であるからだ。

脱領域国家中心的なグローバル国際政治社会空間は、第1—1図の示すように、すべての政治現象（政治社会空間）がグローバル性をもつことを意味するいくつかの特性がみられる。一つのグローバル政治社会が形成されているが、その一番上位のグローバルな政治社会空間から、一番下位の個人が構成する空間まで多層の空間が存在している。一定のそれぞれの規模をもつ政治社会空間は、グローバル政治社会空間を構成している。また、次のようなそれらの政治社会空間は他のそれらと相互に有機的な関連性をもっており、そして、何らかのグローバル性をもっている。(1) グローバル政治社会空間と各々のレベルの政治社会空間の関連性が存在している。(2) さまざまなレベルの空間内を構成する下位的空間（単位）の間に有機的関連性が存在している。(3) より小規模の政治空間に対しグローバル政治空間をはじめより大きな政治空間が構造的インパクトを及ぼしている。(4) 後者の空間に対し前者の空間がつねに構造的インパクトをもっている。(5) 世界の時空の圧縮現象により、時空を超えて共通の政治現象をもつことができる。(6) 物質的勢力のグローバル化

第1—1図 領域国家中心の国際政治社会システム



第1—2図 グローバル政治社会システム



のみならず、意識や規範、理念のグローバル化も存在する。

(1) グローバル化の進展と共に、固い領域国家政治社会空間の枠組みが内外の勢力の浸透によってその地位と機能を低下させることによって、グローバル政治社会空間がグローバル政治社会を構成する一部となったばかりか、グローバル政治社会空間は多層の政治社会空間から構成されている。大小のさまざまなレベルの政治社会空間や政治的単位の間でグローバルな枠組みをもつ世界(グローバル)政治空間が構成されている。したがって、グローバル政治空間をはじめすべての政治社会空間が結びつくこととなる。とりわけグローバル政治社会空間がより小規模の政治社会空間から構成されているところから、後者は前者と有機的結びつきをもっている。それだけに、後者はすべて、何らかのグローバル性を持ち、グローバル政治状況からすべての小規模の政治状況が影響を受けるばかりか、それぞれの政治空間の政治の在り方に対して相互に影響を及ぼすことが常態化している。ある政治社会や単位の政治的行動や変化はつねにグローバル化することとなる。

そうした構造的特性をもつグローバル政治社会の在り方は事実上、主権的領域国家政治社会の在り方に影響を及ぼし、また、その在り方を変容させてきた。そして、当然のことながらそれらの領域国家から構成されている国際政治システムにも影響を及ぼすと同時に、そのシステムを変容させている。グローバル政治システムは、すべての政治空間、行動主体、そして政治的意味空間を

含む全体空間を意味する。そのため、国際政治空間および国際システムはこれまで通りの地位や機能を低下させ、その他のレベルの政治社会に影響を及ぼすことは困難なものとなっている。今日においては實際上、領域国家のみならず、政治現象を単に地域や地方、国内の社会活動として理解すべきであるのみか、理解することができない。前述したように、認識すべき最も注目すべきことは、政治現象をグローバルな次元をもつ社会活動(現象)としてつねにみるべきである。政治現象とその変容する過程それ自体も世界的規模の現象として捉えられるべきである。そうでないかぎり、領域国家の行動様式も地方や社会活動の実態も十分に理解することができない。

第2に、グローバル政治空間を構成する多層のレベルの各々の境界はもはや明確な境界線を引くことができず、それぞれを二分化することは困難であることだ。どの小規模の政治社会空間はグローバル性をもっており、グローバル政治社会空間に組み込まれ、その影響力をますます回避できなくなっている。それだけに、政治社会空間の各々のレベルの間の浸透性や運動性を高めている。上から下までのどの政治社会空間レベルでも直接的に相互に結びついており、また、相互依存関係を構成している。とりわけどの主権的領域国家もこれまで固い境界をもっているところから、国内政治社会空間と国際政治社会空間との境界線は一応引くことができたため、両空間領域は二分化が可能であった。そのため、両空間領域の間での相互運動性も、浸透性もきわめて弱いものでしかなかった。国内的な現象や問題と国際的な現象や問題とが切り離されており、それぞれが固有のメカニズムで生じ、展開し、そして変容するとみなされてきた。

明らかに、国内政治社会空間と国際政治社会空間との二分化(二元性)は、領域性のみならず、国家主権、国家自立性、国家権威性、国家自律性、アナキー・システムなどの条件にも係わりをもっている。それらの条件が両空間領域の二分化を正当化している。しかしながら、グローバリゼーションの進展によって、両空間領域を二分化する境界線は、物理的にも意識的にも、国家内・外の勢力の相互浸透作用の増大によって境界が弱い、低い、そしてもろいものとなり、その存在意義を大きく変容させることとなった。境界の存在意義の著

しい低下はそのまま、国家主権の浸食、国家自立性の低下、国家権威性の低下、国家自律性の喪失、そしてアナキー・システムの変容を意味するといつてよい。

地球上のいかなる政治社会空間、いかなる行動主体(単位)、政治現象、そして行動についてもグローバル政治状況は、国内政治社会空間と国際社会政治空間とを二分化する意味を失わせることになる。これまでの支配的な領域境界の存在意義を大きく低下させるに応じて、地方自治体などの下位国家主体や運動および脱(非)国家主体や運動のグローバル政治への登場ならびにそれらの役割増大を促進する。グローバル政治社会空間における行動主体の多くは、主権の領域国家ばかりか、非政府組織(NGO)、多国籍企業、大衆社会運動、世界・国民世論、非政府間国際組織、地域組織、地方、市民社会、エスニック集団などである。どのような国の政策決定過程と国際政治政策決定過程とが連動し、前者の過程は後者の過程化するし、また、その反対も事実である。そして、その両過程の連動化・浸透化過程に著しい数の脱(非)国家主体が直接に参加したり、批判したり、また、挑戦したりするばかりか、場合によっては、独自の政治公共空間を形成する。

そのように、国内政治社会空間と国際政治社会空間との固い境界をゆるめたり、弱めたりすることによって、国内政治空間における行動主体やその空間で作用している諸勢力や具体的な行動が国境を越えて国際的・グローバル政治空間と直接に結びつくことが可能となる。超領域的關係、つまり脱国家的政治關係はグローバル政治空間の重要で、大きな部分を構成することになる。グローバル化した政治世界は、国際的、脱国家的、国内的、そして地方的過程の多層的・非対称的複合体に他ならない。たしかに、グローバル政治においても、主権の領域国家やそれら国家間政治が依然として支配的地位を占めていることは否定できない。

第3に、国際政治システムの変容の枠組みを明らかにするためには、政治空間の別のより小さな規模のレベルへのグローバル政治空間で作用する諸勢力の直接的かつ同時的インパクトに注目しなければならない。グローバル政治空間レベル以下の政治空間は著しく、前者の在り方に依存しており、そして後者に

よって構造的影響力ををつねに受けることになる。また、グローバル政治空間の在り方がその他のレベルの政治空間レベルに影響を及ぼすと同時に、後者の政治空間レベルの間でも影響をつねに及ぼすことができる。個との政治空間の間での多様な関係から構成されるグローバル政治空間の構造が、政治主体の活動のみならず政治空間の運動もコントロールすることができる。その構造の在り方は、その政治空間における価値配分構造と政治行動主体の特性とによって規定されている。グローバル化の進展とともに、グローバル政治空間の価値配分構造の在り方が強固に形勢されればされるほど、グローバル政治空間が他の下位の政治社会空間に与える影響力はより一層強いものとなる。それらの下位の政治空間、とりわけ国家政治社会空間は、その空間がもっている領域主権性、領域自立性、領域権威性、領域自律性、領域正当性を大きく低下させることになる。それだけに、そのことは今は、グローバル化の進展がもたらすグローバル性の象徴的具体化の現われとってよい。

第4として、第3の特性と反対の側面にも十分に考慮しなければならない。グローバル政治社会空間の価値配分構造つまり秩序がより下位の空間の秩序に影響力が及ぶのみではなく、後者から前者への影響力が及ぶことも認めねばならない。最も下位の個人、地方、国家社会、地域から上位のグローバル政治社会空間へのインパクトが、あるいは、個人や地方が直接的に後者へインパクトを及ぼすことも多くみられる。権力組織としての領域国家がそれ自体が国境を越えてより上位の地域やグローバル空間に影響を及ぼすのみならず、領域内の地方、社会組織、国民、市民、個人が直接的に国境を越えて直接的に、地域やグローバル空間にインパクトを及ぼしている。そのことは、地方や社会集団、市民などの行動や影響力がグローバル性をもっており、グローバル政治社会空間の行動主体となっていることを意味する。そうした行動主体がグローバル・レベルでの秩序の在り方を構成し、規定している。そのため、領域国家間秩序と脱領域国家間秩序とが共存している。もちろん、この二つのサブ秩序は明確に二分化できるものでも、非両立的関係を構成しているのではない。

第5に、第3と第4と特性が結びつくことなく単に別々にグローバル政治社会空間で作用するのではなく、両特性が有機的に一つのサイクルを構成してい

ることが理解されなければならない。グローバル政治社会空間の構造的勢力がより下位の政治社会空間の秩序に影響を及ぼす、上から下へのベクトルと、後者から前者へ影響を及ぼす、下から上へのベクトルが一つのサイクルのベクトルを構成している。すべてのレベルの政治社会空間が相互浸透なり相互連動作用関係を形成している。いかなる政治社会空間もグローバル化する可能条件をもっており、グローバル性がつねに、また、構造的に存在しているとみることができる。したがって、事実上、距離差や時間差が小さくなる、「時空の圧縮現象」が常態化している。「時空の圧縮現象」とは、世界空間領域の距離的・時間的ギャップが減少したり、喪失することを意味するが、とりわけ空間的障害が減少すると同時に、世界空間に存在するものに対してわれわれ人間がより敏感となることを物語っている²³⁾。世界の時空の距離が事実上、かなり早い速度で、また、かなり強い程度で収縮しつつある、といってよい。ある社会生活空間が直接的にグローバル社会生活空間と直接的結びつきをもっており、後者の一部を構成している。

4 グローバル政治の構造と特性

従来の主権的領域国家とそれらの国家から構成されてきた国際政治の枠組みは、グローバリゼーションの進展に伴う領域境界の存在意義の低下と変容および領域国家(間)中心的政治社会空間の存在意義の低下と変容によって、その本質的構造と特性を大きく変容することになった。領域国家中心の国際政治の枠組みは、国際政治現象とのグローバル性の構造化により、地球的規模の政治社会空間をもつグローバル(世界)政治の枠組みに大きく変容しつつある。もちろん、そのことは、これまで支配的地位を占めてきた国際政治の枠組みが、まったく崩壊してしまったとか、根本的に変容して別のまったく新しい枠組み

23) Harvey, David, "Time-Space Compression and the Postmodern Condition," in Held, David and Anthony McGrew, eds., *The Global Transformation Reader: An Introduction to Global Debate* (Cambridge: Polity, 2000), p.84.

が構成されているとか、を意味するのではない。むしろグローバル政治の枠組みのなかでも、依然として変容しつつあっても主権の領域国家とその中心的国際政治の枠組みが存在しており、強いレベルで影響力をもっており、世界政治の枠組みの在り方を大きく規定していることは否定できない。実際に、領域国家中心的国際政治の枠組みはグローバル政治の枠組みの大きな一部分を構成しているといつてよい。換言すると、世界秩序は、領域国家中心的国際政治の勢力と脱領域国家中心的世界政治の勢力とから構成されているとみることができる。前者の勢力が存在していることも一つの現実であるが、後者の勢力も存在していることも一つの現実には他ならない。二つの勢力が共存していることは否定できない。そのために、グローバル政治(世界政治)が具体的に、どのような構造的特性をもっているのかを検討しなければならない。

第1のグローバル(世界)政治の枠組みの構造的特性は、前節でも明らかにしたように、世界政治の関係網(ネットワーク)のグローバル化である。すなわち、国際政治社会空間の地球規模の広がりには他ならない。地球上のすべての主権の領域国家間関係網を超えた脱領域国家間関係網の形成である。地球上のすべての領域国家、地域、社会、エスニック集団、地方、社会集団、国民、市民、脱(非)国家主体、国際組織・制度などを一つの政治関係網に結びつけているグローバルな社会(政治社会空間)を形成している。そのため人々が地球上のどの国に、どの地域に、どの社会に生存し、生活を営んでいようと、直接的であれ間接的であれその関係網によって影響を受け、左右されることが日常化・構造化している。人々をはじめすべての国家主体や地域、社会が例外なく、その政治社会関係網に組み込まれており、それを回避したり、無視したり、否定することは不可能である。なぜならば、ある国家での、ある地域での、ある社会での、あるいはある地方でのでき事や行動、政策決定などが、遠く離れた国家、地域、社会、地方、人々に直接的、間接的な影響を及ぼし、何らかの結果を生み出す状態が日常化・構造化している。またその反対に、後者が前者に対する場合でもまったく同様なことがいえる²⁴⁾。そのことは、米国で

24) Jones, Bruce, Carlos Pascual, and Stephen John Stedman, *Power and Responsibility: Building International Order in an Era of Transnational Threats* (Washington,

起った9・11の同時多発テロ事件、イラク戦争、米国のサブプライム・ローンに端を発する世界金融危機などが象徴的に示している。

しかしながら、何よりも問題なのは、そうしたグローバルな政治関係網がどのような内容をもつものなのか。人々や国家、地域社会、地方などにとってどのような意味をもつものなのかである。グローバル政治関係網の形成は、人々にとって、領域国家主体にとって、地球にとって、また、社会にとって好ましいものなのか、あるいは、悪しきものなのかどうかを問わねばならない。また、グローバル政治関係網が二つの意味をもつとしても、すべての人々やすべての国々にとって同じ意味をもつのかどうかもみる必要がある。実際には、グローバル政治関係網は、好ましい秩序のある、協調的、統合的な関係網と、悪しき無秩序な、紛争（対立）的、分裂的な関係網とから成っている。しかも、後者は一般に地球の規模の問題群や紛争群といわれているような危機的関係網を織り成しており、前者に対して圧倒的な勢力となっている。前者は著しく弱い勢力でしかない。領域国家中心的国際政治の枠組みから脱領域国家中心的世界政治の枠組みへ変容しつつあるといっても、前述のように、グローバル政治関係網のなかでも後者が依然として強い勢力を維持していることを正確に認識しなければならない。ここでも、脱領域国家中心的グローバル政治社会関係（空間）の形成という現実と、領域国家中心的国際政治勢力の大きな存在という現実とが共存していることが理解される必要がある。換言するならば、グローバル政治社会関係網（システム）の特性は、一方で、これまでの主権的領域国家中心の国際政治社会空間における価値や利益、権力、資源の配分決定過程とその結果としての価値配分構造から、脱領域国家中心の世界政治社会空間における価値や権力の配分決定過程とそれらの配分構造の広がりといえると同時に、他方で、前者が依然として支配的な地位を占めているとみるべきだ。それだけに、グローバル政治社会空間は、二つの動きや勢力が弁証法的運動を展開している場（舞台）とみてよいだろう。

第2のグローバル政治社会空間（システム）の特性は、さまざまな主体間で

D. C. : Brookings Institution Press 2009) ,pp. ix-xi and p.3.

構成される価値や利益、権力、資源などの配分をめぐる政策決定過程とその結果としての配分構造が多元化し、また複合化したことである。これまで領域国家中心の国際政治社会においては、安全保障価値や軍事力をめぐる関係網が支配的であった。その国際政治社会空間においては超権威的統治体が存在していないアナキーな政治社会空間であるところから、主権的領域国家にとって最大の価値や利益は何よりもいかに軍事力によって国家安全保障を確保することができるかにあった。しかしながら、グローバル化に伴ってグローバル政治が形成されるなかで領域国家の軍事力中心的安全保障価値が容易に確保できなくなる。それと同時に、経済的価値や環境保全価値、社会文化的（アイデンティティ）価値、知識・情動的価値をめぐる関係網などのように、世界政治社会における関係網が多元化するなかで国家安全保障価値がその地位と機能を著しく低下させることとなった。今日ではますます、多様な価値や利益、権力などをめぐる多元的關係網が構成されている。主権的領域国家間の相互依存関係の高まりによるひとつの世界が形成されているものの、そのなかで多元的關係世界とが共存している²⁵⁾。国際政治社会空間において価値や利益、権力の多元化が深まり、また、多種多様な問題領域が拡大することに対応して、領域国家の境界を越えてNGO、多国籍企業、社会集団、社会運動、世論、市民、地方、エスニック集団、非政府間国際組織などがそれぞれの価値や利益、目標を求めて脱領域国家的行動様式をとっている。脱領域国家的関係網は、領域国家的関係網と対抗したり、その関係網に抵抗したり、挑戦したり、そしてまた、その関係網を否定したり、批判する性向をもっている。場合によっては、両関係網は相互補完関係なり、両立的関係を構成する。

いずれにしても、グローバル政治社会空間にはさまざまな行動主体の間で多元的で、また複合的な関係網が形成されている。さまざまな価値や問題をめぐる関係網は個別的に存在しているのではなく、相互に複雑に絡んでいる。その

25) 経済安全保障、環境安全保障、技術安全保障、食糧安全保障、資源エネルギー安全保障、人権安全保障、人間の安全保障、総合安全保障といった用語は、国家・軍事力中心的安全保障を批判するなかで出てきたものであるばかりか、多元的關係網や多様な相互依存關係網が形成されていることを象徴している。

ため、望ましくない、紛争的な関係網の統治や変革にはきわめて困難を伴う。もしそれら紛争関係網を解体するためには、個別的にはなく総合的に対応しなければならない。グローバル・レベルで望ましい、協調的・統合的關係網は著しく弱いものでしかない。事実上、望ましくない、紛争的關係は一日ごとによりグローバル化すると共に、より緊密にかつ層の厚い、強いものになっているのに、望ましい、協調的・統合的關係網は前者に適切に対応した強力なものを形成することができない。両者の間のギャップがますます拡大している。前者の關係網が、いわば地球的規模の問題群なり紛争群を具体的に拡大再生産している。

第3のグローバル政治社会の特性は、第1と第2の特性と関連しているが、グローバル政治社会領域(空間)と領域国家政治社会空間との境界が著しくあいまいなものとなるように、両領域(空間)の相互連動性なり相互浸透性の高まりである。そのため、両政治社会空間の明確な二分化ができなくなったばかりか、ほとんど無意味なこととなっている。領域国家政治空間とグローバル政治空間との相互連動性や浸透性が高まれば高まるほど、両者の境界線をより一層あいまいで、不透明なものにすると同時に、主権的領域国家の主権性、領域性、自立性、権威性、権力性、自律性、そして正当性を低下させることになる。世界が著しく流動化しており、領域国家空間とは必ずしも一致しない権威の領域を形成する。その領域は国家や政府によって支配され、統治される領域ではない²⁶⁾。現代社会の政治的組織の多くの問題が国民国家の範囲を超えていることは明らかである。国家が問うべき多くの問題は自律的管轄の外に存在する。世界は相互依存の増大する過程を経験している。米国連邦準備金の利子の引上げの決定はメキシコの失業を高める。ソ連のチェルノブイリ原発事故は全世界に大きな影響を及ぼしたし、また、ナイジェリアのエイズは地球的規模で拡散している。また、80年代と90年代の時期に、領域国家は内部からの新しい批判の挑戦を受けている。新・旧のユーゴスラビア、チェコスロバキア、ソ連邦などの分裂、また、カナダ、スペイン、イギリス、イタリアなどでの分離運

26) See Rosenau, James N., *Along the Domestic-Foreign Frontier: Exploring Governance in a Turbulent World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997),

動、そしてパレスチナ人やクルド人問題や大量移民問題の存在、などをみる事ができる²⁷⁾。

そうした領域国家内政治空間の価値配分決定過程と国際政治社会空間における過程とが、相互に連動し、あるいは浸透し合う状態が構造化している。前者の政治社会空間における問題や紛争が国際化し、また、後者におけるそれらが国内化する。しかしながら、そうした一連の現象は、グローバル政治において領域国家中心的国際政治より脱領域的国家中心的世界政治が支配的地位を占めていることを意味しない。そのことは、地球的規模の問題群や紛争群が容易に解体することが困難であることを物語っている。

第4のグローバル政治社会の特性として指摘すべき点は、両者の政治社会空間における軍事力の地位や機能を著しく低下させていることだ。国際政治社会空間における領域国家の価値や利益、目的、権力の維持・強化の実現を可能にする中核的手段であった軍事力は、その巨大な破壊力のため容易に使用できなくなったこと、国際政治社会における価値や利益の多様化、価値配分決定主体の多元化、価値配分決定過程の多元化・複雑化、その過程と国家政治過程との相互浸透化などの高まりのなかで、これまで占めていた地位や機能を大きく低下させている。これまで領域国家間の権力闘争が支配的で、自国の軍事的安全保障が最大の国家利益とされ、軍事力の拡大競争が常態化し、軍事力が目的の出現にとって最も有効な手段として通用してきた国際関係状況は根本的に変容しつつある。国内化した対外問題の増大する相互依存性と国家権力の決定要因にとって物理的強制力の手段の重要性の減少を認識する必要がある²⁸⁾。

たしかに、グローバル化の進展によって、軍事力の所有性=使用性=効用性という等式が成り立たなくなっている。今では、核抑止機能自体が疑わしくなるほどに、核軍事力の所有性自体が逆機能しうる矛盾を内包している。また、軍事的発展は国家領域を防ぐために軍事力を使用する国家能力に対する激しい

27) Archibugi, Daniele, "Cosmopolitical Democracy," in Archibugi, Daniele, ed, *Debating Cosmopolitics* (London: Verso, 2003), pp. 3-4.

28) Urry, John, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century* (London: Routledge, 2000), p.19.

抵抗を生み出している。ポスト・モダン戦争の経験的現実によって、領土に基礎を置く国家への忠誠を前提とする政治の連続性は保証されないし、倫理的にも防ぐことができない²⁹⁾。しかしながら、そうした問題がありながらも、他方で、軍事力の地位や機能の著しい低下にもかかわらず軍事力が依然として高いレベルで存在し、また、強化されている、という矛盾がある。核を中心とする大量破壊兵器や近代兵器の地球的規模での広がりや止まることがない。いつでも核戦争ははじめすべての戦争やテロに対応しうる世界軍事秩序（体系化）が存在している。その秩序の存在自体がすべての人々や国々に不完全をもたらすばかりか、軍事的関係網が別のさまざまな紛争の関係網と結びつき、後者を支え、また強化している。

第5のグローバル政治社会の特性は、不平等な価値配分構造と、その構造を規定したり、支えている不平等権力配分構造の存在に他ならない。たしかに、前述のように、多元的主体の間で価値配分決定過程が大きく地球的規模にまで拡大され、それをめぐる多元的な関係網が複雑かつ重層的に形成され、展開している。しかしながら、そうした空間の広がりにより一層のグローバル化と、さまざまな主体間関係の緊密化の一層の高まりにもかかわらず、領域国家中心の、大国中心の価値配分決定過程やその結果としての価値配分構造、また、権力配分構造の存在は基本的には変っていない。むしろこれまで以上にそれら構造は強固なものとなっている。

南北問題に象徴されているように、国際政治社会空間の中心部と周辺部との支配—従属関係という非対称的な価値配分構造は依然として高いレベルで存在している。明らかに、第二次大戦後に過去植民地であった非ヨーロッパ地域は、形式的には新興の主権の領域国家となり、国際政治社会空間に参加することで、その政治社会空間が地球的規模に拡大したものの、事実上、ヨーロッパの中心部と非対称的な非ヨーロッパの新興諸国の周辺部との間で支配—従属関係がこれまで以上に構造化され、不平等で、非対称的な価値配分決定過程が強化されている。北の先進諸国や大国によって構成される対称的な、価値所有、

29) Opello, Walter C. Jry and Stephen J. Rosow, *op. cit.*, p.232.

価値配分決定権をもつ中心部と、南の開発途上諸国から構成される周辺部との間で、不平等で、非対称的な価値所有、価値配分決定権から成る構造を形成している。たしかに、第三世界諸国の一部はより先進諸国に近い国とし経済発展を可能にしたことは事実として認めることができるものの、南北間で支配—従属関係構造は依然として存在しているどころか、かえって強化されている。結局、グローバル化により領域国家は他国からの勢力の浸透性を著しく高めたものの、不平等な価値・権力所有単位としての主権的領域国家の存在は変わることなく存続している。

第6のグローバル政治社会の特性としてみることができるのは、部分的で、不完全なものであれ、望ましい、協調的・統合的關係網を構成し、それを支えるいくつかの条件が存在していることだ。人類意識・地球共同体意識や、共通目標・価値・政策・組織・運動の形成、また、それらに基づいてさまざまな行動主体間での協調体制の構築の模索である。悪しき、紛争的・分裂的關係網のグローバル化の表出である地球的規模の問題群や紛争群の存在を認識することで、未成熟で、部分的なものであれ、地球的規模の問題群や紛争群の統治や解体、変革を部分的であれ可能にするようなグローバル・ガバナンスが形成され、一定の機能を遂行していることは否定できない。そうした機能を果すために必要な具体的な国際組織や国際制度、国際法、国際レジーム、規範、倫理、そして脱（非）国家主体などが、協調・統治体制の構築を試みている。もちろん、そうした試みは地球的規模の問題群や紛争群を統治したり、解体するには不十分なものであることはいうまでもない。なぜならば、グローバル・ガバナンスといっても、領域国家やその間で形成される国際組織や制度などの「上からのガバナンス」は、グローバル政治社会全体の価値や利益よりも個あるいは部分としての領域国家の価値や利益を優先する志向性をもっている。

第7のグローバル政治社会の特性として、第6の特性と関連しているが、その政治社会を構成する多種多様な脱（非）国家主体の登場とその役割の増大を挙げねばならない。これまで国際政治社会の構成主体は主権的領域国家にすぎなかったものの、グローバル政治社会を構成する主体として大量の脱（非）国家主体の登場であり、そしてその政治社会の在り方を大きく規定している。過

去20年の間、グローバル化の一つの重要な特徴は、INGO（国際非政府組織）やグローバル社会運動の前例のないほどの成長である。それと共にそれらの脱（非）国家主体は新しいグローバル市民社会を構成している。それらの存在は経済的グローバル化の新自由主義的論理に挑戦している³⁰⁾。たしかに、グローバル政治社会において脱（非）国家主体が領域国家主体に取って代わったことを意味するものではないが、領域国家主体の地位や機能の低下に伴って脱（非）国家主体がその地位や機能を高めつつあることは認めなければならない。主権的領域国家間で構成する政治的・経済的・軍事的・社会文化的・地球環境的・知識情報的關係網に対抗したり、補完したり、従属する形で多種多様な關係網を構成している。

脱（非）国家主体やそれらが構成する脱領域国家中心的關係網は、領域国家の行動様式や国家間關係様式に影響を及ぼしたり、規制する能力を強め、グローバル政治社会においてその比重を高めつつあるものの、依然として領域国家間中心的關係網が支配的であることは否定できない。領域国家主体と脱（非）国家主体との關係は必ずしも非両立的な、ゼロ・サム的關係を構成してはいない。むしろ両者は両立的關係なり、非ゼロ・サム的關係を構成している場合が多い。実際に、地球的規模の問題群や紛争群を統治したり、解体するためには、領域国家主体も脱国家主体の力を借りたり、利用したり、協調する必要がある。脱（非）国家主体はグローバルに政治社会の形成の結果であると同時に、その原因に他ならない。いずれにしても、地球的規模の問題群の統治や解体が困難なのは依然として、グローバル政治社会において領域国家がまた領域国家中心的国際關係網が大きな勢力を維持しており、脱（非）国家主体や脱領域国家中心的国際關係網が弱い勢力であることを物語っている。

第8のグローバル政治社会の特性は、アイデンティティ問題のグローバルな広がり、アイデンティティの多元化に関するものだ。これまで伝統的には、

30) Robinson, Fiona, "Human Rights and the Global Politics of Resistance: Feminist Perspectives," in Armstrong, David, Theo Farrell and Bice Maiguashea, eds., *Governance and Resistance in World Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), p.161.

主権的領域国家なり政府が人々のアイデンティティと忠誠心を独占してきた。しかしながら、グローバル化の進展と共に、アイデンティティや忠誠心の主要な対象となってきた主権的領域国家がグローバル政治社会においてその主体性、主権性、領域性、自立性、権威性、自律性、正当性を大きく低下させたり、弱めたために人々のアイデンティティや忠誠心を強力につなぎとめておくことが困難となっている。また、グローバル政治社会での価値や利益、権力の多元化が進み、アイデンティティや忠誠心の新しい対象が出現することとなった。そしてまた、領域国家政治社会内でも価値や利益の多元化・分裂化現象が進展するなかで、領域境界を越える価値や価値主体に関心を広げることによって、アイデンティティや忠誠心の多元化をいっそう進めた。

その結果、領域境界をはさんで、それをのり越えてよりグローバルな社会空間の方向と、また、国境内部のより小さな政治空間へのアイデンティティや忠誠心の分散化・多元化現象が一般化している。その対象が広く、人類、地域、国家、社会、民族、階級、国民、市民、地方、社会集団などへ拡散している。そのことは、それぞれのアイデンティティが個別的に分裂しているとか、非両立的関係にあるとかを意味するものではない。人類と階級、人類と市民・国民、民族と地域、国家と社会などへのアイデンティティは両立しうる。いずれにしても、グローバル政治社会でアイデンティティや忠誠心が多元化していることは、国家主体性、領域性、主権性、自立性、自律性、また正当性が著しく低下していることを物語っている。しかしながら、アイデンティティや忠誠心の多元化・分散化は主権的領域国家に対するアイデンティティや忠誠心の喪失を意味するものではない。むしろ今日でも、領域国家主体が他に比べて、依然として人々のアイデンティティや忠誠心の強い対象となっていることは認めなければならないだろう。

第9のグローバル政治社会の特性として指摘すべきは、グローバル政治で展開されるゲームのルールとして新しい内容をもつものが出現したことだ。領域国家中心的国際政治において各々領域国家は自国の価値や利益を他国のそれらより多くを得るための行動様式をとってきた。どの領域国家も相対的な利得を求めて他国と権力ゲームを展開してきた。したがって、自国の利得の増大は他

国の利得の減少をもたらす形でゲームが行われた。すなわち、プラス・マイナスがゼロになるようなゲームである。例えば、冷戦中の米ソの安全保障価値をめぐる相互関係は、典型的な「ゼロ・サム・ゲーム」のルールが支配していた。また、1970年代から80年代までの日米経済・貿易摩擦も、日米の経済的価値をめぐる「ゼロ・サム・ゲーム」に他ならない。グローバル政治社会の形成過程で、そうした「ゼロ・サム・ゲーム」の他に、両国とも一定の利得を手に入れることが可能な「非ゼロ・サム・ゲーム」が行われるようになった。地球的規模の問題群や紛争群がすべての領域国家を規制しているグローバル政治状況では一国勝はきわめて困難となり、両者が協力して共に利得をうるような行動様式を取らねばならなくなった。そうでないかぎり、両者とも利得を喪失する可能性が高まってきた。グローバルな危機構造が強化されればされるほど、「ゼロ・サム・ゲーム」のルールは容易に通用しなくなり、「非ゼロ・サム・ゲーム」のルールを積極的に求めざるをえなくなりつつある。後者のルールをどの領域国家も同様な協調的行動様式をとり、そのルールが支配的なものになれば、地球的規模の問題群や紛争群の統治や解決に大きくつながるといってもよい。しかしながら、現実では「非ゼロ・サム・ゲーム」より「ゼロ・サム・ゲーム」のルールが依然として強力な勢力をもって通用している。したがって、ここでもグローバル政治状況においても主権的領域国家中心的国際政治が大きな勢力をもっていると認めざるをえない。

5 主権的領域国家中心的国際政治の現実と脱領域国家中心的世界政治の現実との共存

今日、われわれ人類は、これまでの主権的領域国家中心的国際政治から脱主権的領域国家中心的世界政治への変容過程に直面している。しかしながら、前者が崩壊し、新しい政治的枠組みをもった後者へと転換したことを意味するのではない。たしかに、これまで長期にわたって国際政治の枠組みを創ってきた領域国家中心的国際政治は、よりグローバル化された脱領域国家中心的世界政治の枠組みのなかで全体ではなく、大きいながらも一部分を占めるように変容

したと理解できる。いわば国家中心的政治社会 (state-centric political community) に関係なく、別に新しい世界中心的政治社会 (world-centric political community) が存在しているのではない。第1—3図と第1—4図が示すように、後者の政治社会のなかで前者の政治社会が依然として大きな地位を、また、勢力を占めている。

したがって、グローバル政治の枠組みは、二つの現実から構成されていると
いってよい、一つが、グローバル政治社会の形成されるなかで、これまで支配
的な主権の領域国家中心的国际政治の枠組を変容させ、その地位と機能を低下
させながらも、新しいグローバル政治社会の枠組みのなかで依然として大きな
勢力を維持している、という現実だ。もう一つが、地球的規模の問題群や紛争
群によっておおわれているグローバル政治社会を統治し、解体し、また、変革
を模索する脱主権の領域国家中心的世界政治の勢力が小さく、弱いながらも存
在している、という現実である。グローバル政治社会(世界政治)の枠組みを
構成する前者の領域国家中心的国际政治の勢力を現状維持志向勢力とし、後
者の脱領域国家中心的世界政治の勢力を現状変革志向勢力とみた場合、グロー
バル政治はそうした二つの勢力の弁証法的運動によって形成され、展開され、変
容し、そして変革していく過程と捉えることができる³¹⁾。また、その二つの勢
力を国家中心的政治社会と世界中心的政治社会で作用する二つの勢力といいか
えて、グローバル政治をそうした二つの対抗勢力の弁証法的ダイナミクスと理
解することもできる。あるいは、現状維持志向勢力と現状変革志向勢力を、よ
り具体的にかつ集約的に、個(部分)の価値や利益を全体のそれらより優先す
るコミュニタリアン志向勢力(コミュニタリアニズム中心的勢力)と、全体
(構造)の価値や利益を個のそれらより優先するコスモポリタン志向勢力(コ
スモポリタニズム中心的勢力)との相克運動過程としてグローバル政治を位置
づけることもできる。さらに、政治現象を社会的価値や利益の配分決定構造や
それらの配分構造の在り方に注目するならば、前者の勢力をコミュニタリアン

31) 星野昭吉『世界政治と地球公共財—地球的規模の問題群と現状変革志向地球公共財—』参照。

志向世界（国際）秩序と、後者の勢力をコスモポリタン志向世界秩序といい換えることもできる。

いずれにしても、重要なことは、二つの勢力から世界秩序がどのような関係を構成しているかを解明していくことだ。そうでないぎり、世界政治（グローバル政治）の現実はどのようなものなのか、世界政治はどのように変容しているのか、世界政治はどのように変革する必要があるのか、どのように変革する可能性があるのか、地球的規模の問題群や紛争群はなぜ形成され、拡大していくのか、なぜそれらの統治や解決は困難なのか、また、その統治や解決、変革にどのような必要・可能条件があるのか、などの問に対する適切な解を抽出することはできない。

前節で指摘したグローバル政治社会の特性として指摘した条件は、二つのさまざまな側面をもつ主権的領域国家中心的国際政治社会勢力と脱主権的領域国家中心的世界政治勢力、すなわち、コミュニタリアン志向勢力とコスモポリタン志向勢力を含んでいる。それらは、グローバル・レベルでの悪しき紛争的・分裂的關係網と望ましい協調的・統合的關係網、それぞれの關係網の多元化・複合化、国内政治社会領域と国際（グローバル）政治社会領域との紛争の問題の相互連動（浸透）性と両領域の紛争や問題に対する統治や解決の相互連動（浸透）性、軍事力の体系化や強化と軍事力の地位や機能の低下、グローバル・レベルでの価値の不平等配分構造とそれに抵抗し、反対し、挑戦する勢力の存在、国家・国民意識と人類・地球運命共同体意識、上からのグローバル・ガバナンスと下からのグローバル・ガバナンス、主権的領域国家主体性と脱（非）領域国家主体性、主権的領域国家志向アイデンティティや忠誠心と脱国家志向アイデンティティや忠誠心の多元化、「ゼロ・サム・ゲーム」のルールと「非ゼロ・サム・ゲーム」のルール、などである。それらの二つの勢力は基本的には、前述のように、グローバル政治社会にとっての全体の価値や利益よりも個（主権的領域国家）の価値や利益を優先するコミュニタリアン志向勢力と、後者の価値や利益を優先するコスモポリタン志向勢力に他ならない。

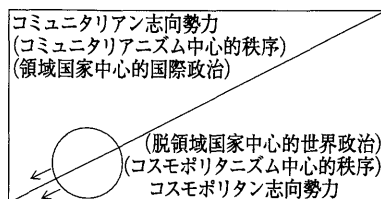
何よりも問題なのは、一つのグローバル政治はコミュニタリアン志向勢力とコスモポリタン志向勢力とから構成されているものの、二つの勢力の關係は著

しい非対称的なものであり、前者の勢力が後者の勢力に比べて強力なものであり、グローバル政治の在り方を大きく規定している。たしかに、後者もグローバル政治の在り方に一定の規制力をもっていることは認めねばならないが、その勢力はコミュニタリアン志向勢力に対する抵抗力をもつてはいない。つねにコスモポリタン志向勢力はコミュニタリアン志向勢力によって大きく規制され、その脆弱性をより一層強めている。前者はときどき後者に対して抵抗なり反抗という形をとることがあるものの、後者に何らかの小さな影響力を及ぼすことがあっても、根本的に後者を大きく左右できるような抵抗力をもつことは困難である。第1—3図が示すように、現状維持志向性を内包しているコミュニタリアン志向勢力は、現状変革志向性をもつコスモポリタン志向勢力の影響力を無視することで、前者はグローバル政治の在り方を規制する支配的勢力を維持し、強化することになる。両者はより一層ギャップを拡大することになる。

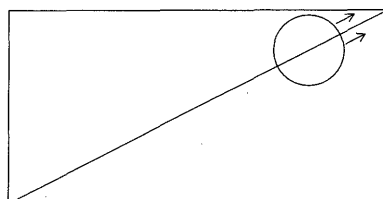
その結果が、グローバル・レベルでの悪しき、紛争的・分裂的關係網の維持・強化であり、それが具体的に、地球的規模の問題群や紛争群の維持・強化という形をとって表出することになる。それらは、核をはじめとする大量破壊兵器の拡散問題、軍備拡大競争、武力紛争、民族・宗教紛争、テロ活動、南北問題、地球環境破壊問題、人口・食糧・資源エネルギー問題、貧困・飢餓・栄養不良問題、民族・文化・ジェンダー・移民・難民などのアイデンティティ問題、インフルエンザ・AIDS・SARS・鳥インフルエンザなどの伝染病、国際犯罪集団問題、麻薬問題、人権抑圧問題などである。

そうした地球的規模の問題群や紛争群は基本的には、個の主権的領域国家の安全保障や権力、経済的豊かさ、アイデンティティ、環境保全、知識・情報、技術、正義などの価値や利益を全体のグローバル政治社会のそれらの価値や利益に優先させる結果に他ならない。すなわち、主権的領域国家中心的価値体系とグローバル政治社会中心的価値体系との非両立的関係であり、また、両者の価値体系の「ゼロ・サムの関係」である。地球的規模の問題群や紛争群は、いわばコミュニタリアン志向勢力がコスモポリタン志向勢力につねに優先され、後者の勢力より強力である状態の結果である。両勢力が非両立的関係なり、

第1—3図 二つの勢力の配置図A



第1—4図 二つの勢力の配置図B



「ゼロ・サム的關係」を構成するかぎり、それらの問題群や紛争群をつねに拡大再生産することは不可避ことになる。そのため、領域国家がコミュニタリアン志向勢力を維持し、強化するかぎり、また、コスモポリタン志向勢力が前者の勢力に抵抗する力をつけないかぎり、地球的規模の問題群や紛争群は維持され強化されることになる。

6 グローバル政治におけるコスモポリタン志向勢力優位枠組みの必要・可能条件

グローバル・レベルでの多種多様な矛盾や問題、紛争によって支配されている危機的な世界政治構造を変革していくことはきわめて困難なことであり、現実的ではなく、著しく理想的なこととされている。しかしながら、その危機的な世界秩序構造の変革が単なる理想ではなく、きわめて現実的なものであると同時に、必然的なものである³²⁾。現実のグローバル政治は本質的に、コミュニタリアン志向勢力やコミュニタリアニズム中心的世界秩序からコスモポリタン志向勢力やコスモポリタニズム中心的世界秩序への方向が強く求められている。

そうした動きは必ずしも現実に強化されているのではない。むしろ事実上、前者のコミュニタリアン志向勢力やコミュニタリアニズム世界秩序が依然と

32) 星野昭吉『世界政治の弁証法—現状維持志向勢力と現状変革志向勢力の弁証法的ダイナミクス—』35—38参照。

して支配的なものとなっている。後者のコミュニタリアン志向勢力は弱いままだ。しかしながら、そのことには強い前者の現実の変容しないとか、変革することができない、また、弱い後者が変化しないとか、強力なものになることは困難である、ということの意味するものではない。前述したように、グローバル化の暗部としての地球的規模の問題群は、例えばエネルギー安全保障や国家の失敗などはより緊急で複雑なものとなっているものの、それら問題を問う能力はその動きにつり合うものではない。問題群や紛争群は本質的にグローバルなものであるが、それらに対する資源や正当性は著しく国家的レベルで維持された世界である。脱国家的脅威の世界であるため、世界中のどの人々も政府も何らかの行動あるいは何も行動しないことが遠く離れた他者に害を及ぼすことになる。国家の安全保障がグローバル安全保障と相互依存関係にあり、また、国家政府が単独で行動することによっては市民を守ることはできない。

しかしながら、そうした地球的規模の問題群や紛争群をほとんど統治したり、解決できないにもかかわらず、世界における権力の主要なたまり場は国民国家のままである。国民国家は現代世界を理解する場合に中心的存在である。その理由は、国民国家が継続しているということばかりか、主要な方法でそれらの政治的原子的単位が変容しているためでもある。新しい構成メンバーが権力の変容した軸に沿って作用することができる³³⁾。地球的規模の問題群や紛争群の支配するグローバル政治において国民国家が著しくその地位や能力、機能を低下させていることが現実であるものの、国家は事実上、すべての国家に共通する地球的規模の問題群を統治したり、解決するための行動様式を積極的にとろうとするどころか、かえって自国中心の、国家利益を維持・強化する様式をとっている。U. ベックが強調しているように、重要な事実は現在、人間の条件がそれ自体コスモポリタンなものとなっているが、国家や人々の意識や行動様式はコミュニタリアンなものになっている。テロの脅威をはじめとしてグ

33) Brennan, Timothy, "Cosmopolitanism and Internationalism," in Archibugi, Daniel, ed., *loc. cit.* p.40.

ローバル危機は国境に関係ない。グローバル危機によって生じたショックは連続的に世界的規模の政治的問題を生み出している。コスモポリタニズムは単に論争的な国家的理念であることをやめ、現実の領域に入っている。国家中心の見方に代ってコスモポリタン中心の見方が要求されている³⁴⁾。

したがって、今日の世界政治（グローバル政治）においては、強いコミュニタリアン志向勢力（コミュニタリアニズム中心的秩序）と、弱いコスモポリタン志向勢力（コスモポリタニズム中心的秩序）が共存している。地球的規模の問題群や紛争群の統治や解決のためには後者より前者が変革的勢力となることが要求される。なぜならば、前者が強く、支配的な勢力であるかぎり、地球的規模の問題群や紛争群は拡大・強化こそすれ、それらを縮小したり、統治したり、解決することが本質的に不可能である。前者の勢力と地球的規模の問題群や紛争群の解決とはつねに、非両立的関係、つまり「ゼロ-サムの関係」にある。前者が強まれば強まるほど、後者の問題群や紛争群も拡大再生産されることになる。

しかしながら、そうした条件は、現在の世界政治においてコミュニタリアン志向勢力が支配的であることが不可避であるとか、正当性をもつことを意味しない。自国（己）の価値や利益、権力、資源などをグローバル社会全体のそれらに優先することは、グローバル危機構造が拡大・強化されている現実の世界政治においては著しく困難となっている。そうした性向を維持・強化することは、かえって自己の価値や利益、権力、資源を喪失することになる。現実の危機的な世界政治において、自国の価値や利益などは、他国と協調したり、「非ゼロ-サムの関係」を積極的に構築していかないかぎり、実現することができない。換言するならば、自己の個別的な価値や利益などを一方的にグローバル社会全体のそれらよりも優先して求めていくと、大きくそれらを失うことになる。人間の生存生活（国家社会の生存や発展）に関する社会的価値や利益、資源は本質的に稀少性が高く、有限なものである上に、それら稀少性や有限性がグローバル危機構造のなかでよりその性向を高めている。そのため、個の価値

34) Beck, Ulrich, *Cosmopolitan Vision* (Cambridge : Polity, 2006), p.2.

や利益を優先するコミュニタリアン志向勢力を強めることは、その稀少な価値をより小さなものにすると同時に、自己が得る価値を縮小するばかりか、喪失することになる。むしろ自己の価値や利益を維持し、強化しようとするならば、全体の価値や利益を優先することによってかえって可能となる。

それでは個の価値より全体の価値を優先するコスモポリタン志向勢力の必要条件に対し、その可能条件はどのようなものであろうか。第1に考慮すべきは、個の価値を全体のそれらより優先するコミュニタリアンの利益志向勢力を全体の価値や利益を優先するコスモポリタン志向勢力が超克する可能性は、現実の世界政治において二つの勢力がで本来的に相互構成関係を形成している点にある、ということだ。一般的に、前者の勢力は現実的なものであり、理想的な後者の勢力によって影響を受けることも、規定されることもないとみなされている。しかしながら、実際に、後者も現実的なものに他ならない。たとえ理想的あるいは規範的なものであっても、現実を二分化することもできず、両者はつねに相互構成関係を形成している。後者はつねに現実的なものを変革し、再構成する力をもっている。

第2に、個の価値や利益を全体のそれらより優先しようとコミュニタリア志向国家が自ら、後者を求めることでかえって前者を維持し、強化することを可能にすると考え、積極的に後者を求めることでかえって前者の獲得を可能にする。一般的には、コミュニタリアン志向勢力とコスモポリタン志向勢力とは非対称的で、また、「非ゼロ・サム的關係」であるところから、後者が前者と対等な条件をもっていないため、優位に立つことは困難であるとみられている。しかしながら、前者が自ら現状変革的行動をとることはきわめて容易である。そうして、そのことによってかえって自己の個別的価値や利益を維持・強化することもできる。

第3は、さまざまな主体者の中で、誰もが他者との関係で両立的な、共通の価値を構成することが可能だ。主体間で相互にそれぞれ求める価値や利益を全て喪失することなく、共に一定の共通した価値を手に入れることができる。主体者のどれかが共にそれらの求める価値を喪失することなしに、両者とも手に入れる「非ゼロ・サム的關係」の構築が、コスモポリタン志向勢力を大きく強

化していく。すべての主体間での価値の両立性が、つまり「非ゼロ・サム的關係」が促進されればされるほど、グローバル社会全体の価値や利益の優先を保証することになる。

第4は、主体間の価値や利益、権力、資源の配分格差を縮小し、価値配分の構造を構築することで、コスモポリタン志向勢力が大きく強化されることになる。主体間の価値や利益の共通性が存在しても、主体間のそれらの平等性が本質的に著しく弱い場合には、コミュニタリアン志向勢力が強いままで、コスモポリタン志向勢力は強いものとならない。グローバル社会の価値や利益を個のそれらより優先する状態を可能にするには、主体間の価値配分の平等性をより高めることが本質的に必要となろう。

第5は、現世代中心の価値や利益の維持・拡大を求めるのではなく、将来世代にとって必要かつ重要な価値や利益の視点から価値内容を規定し、それを求めることで、グローバル社会の価値体系が個別（部分）のその体系を超克することができる。グローバル化が進展し、ますます将来の価値体系の維持をむずかしくするグローバル政治構造の危機が深化すればするほど、現世代中心の価値体系の維持志向の勢力や政策、行動は、将来世代の価値体系を根本的に破壊するようになる。将来世代中心の価値体系の維持・強化を模索するなかで、グローバル社会においてコスモポリタン志向勢力がより強いものとなる。

第6は、地球的規模の問題群や紛争群が構造的に規定しているグローバル政治社会において支配的地位を占めている大国や先進諸国から成る中心部からではなく、その中心部の支配の対象となっている周辺部の視点からグローバル政治の全体の実像とその現象の変革の可能条件の抽出が可能であり、コミュニタリアン志向勢力の超克が可能となることだ。周辺部の視座からグローバル政治を構成することは、中心部のそのなかでの存在を否定するとか、無視することではない。中心部がグローバル政治構造（秩序）の全体ではなく、その大きな一部を構成する存在として適切に位置づけることを意味する。そうしたなかで周辺部と中心部との有機的な対称的關係、つまりグローバル社会における価値や利益、権力、資源をめぐる「非ゼロ・サム的關係」を構成する可能性を抽出することができる。

そうした六つの、個（部分）の価値や利益、権力、資源より全体のそれらを優先するコスモポリタン志向勢力（コスモポリタニズム中心的秩序）が、グローバル政治において支配的なものとみることができる。第1—4図が示しているように、とりわけこれまでコミュニタリアン志向勢力を維持し、強化してきた大国なり先進諸国が自らが積極的にコスモポリタン志向行動をとることでコミュニタリアニズム中心的秩序がコスモポリタニズム中心的秩序へ大きく転換していくことになる。そうしたなかで、地球的規模の問題群や紛争群の統治や解決、変革の方向へ強く押し進めることを可能にしよう。